

学会報告

第12回富山大学看護学会学術集会

学術集会長 比嘉 勇人 (富山大学大学院 医学薬学研究部 精神看護学講座)

開催日 2011年12月10日 (土)

会場 富山大学新看護学科棟 1階10教室

◆特別講演

実践と研究

～省察によってしなやかに対立の垣根を越えるプロフェッショナルとしての看護職～

講師 梶山 委都子 先生

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程

◆一般演題

1. 看護学生の私的スピリチュアリティ (SRS) と首尾一貫感覚 (SOC) の関連性
山田 恵子, 比嘉 勇人, 田中 いずみ
富山大学大学院医学薬学研究部 精神看護学講座
 2. 卒後2年目の新人看護師の経験と看護
—新人看護師の看護実践に関するナラティブからとらえた成長の構造からの報告—
田中 いずみ, 比嘉 勇人, 山田 恵子
富山大学大学院医学薬学研究部 精神看護学講座
 3. 臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について
—KH Coder を利用した分析—
松浦 純平¹, 上野 栄一², 一ノ山 隆司³, 京谷 和哉⁴, 上平 悦子¹, 梅林 かおり¹
¹奈良県立医科大学医学部看護学科, ²福井大学医学部看護学科,
³国際医療福祉大学小田原保健医療学部 看護学科, ⁴真生会富山病院
 4. 3eAnalyzer システムを用いた双方向授業の効果
上野 栄一¹, 松浦 純平²
¹福井大学医学部看護学科, ²奈良県立医科大学医学部看護学科
 5. ラジオ放送が目覚め・昼食摂取量・睡眠導入に与える効果
松田 英之, 荒谷 和弘, 池田 紗衣子, 後田 あゆみ
富山大学附属病院
 6. 高齢者の老いの意識と生きがいとの関係～高齢者自身によるボランティア活動を通して～
苗加 拓也¹, 野口 真里¹, 長津 舞², 新鞍 真理子³
¹富山大学附属病院, ²近畿大学医学部附属病院, ³富山大学大学院医学薬学研究部
-

一般演題 1

看護学生の私的スピリチュアリティ (SRS) と首尾一貫感覚 (SOC) の関連性

○山田恵子, 比嘉勇人, 田中いずみ
富山大学大学院 医学薬学研究部 (医学)

【目的】

本研究では、こころの構造を「スピリチュアルな能動的意識」と「メンタルな受動的意識」の多重構造であると仮定してその仮説モデル (こころの多重構造モデル) の妥当性を検討し、看護学生の私的スピリチュアリティ (こころの内発的なつながり性) と首尾一貫感覚 (こころの刺激反応的な対応性) の関連性を検証する。

【方法】

調査は、富山大学臨床・疫学等に関する倫理審査委員会の承認を得て2011年10月4日～同年10月6日に実施した。分析対象は、研究参加に同意したA大学の看護学生1～3年生216名の有効回答者212名とした。

「能動的意識」を測定するために、私的スピリチュアリティ評価尺度 (SRS-A) を用いた。SRS-A は、「意欲 (望みを成し遂げようとするこころ)」「深心 (深く求めたことを信じるこころ)」「意味感 (意味づけを実感するこころ)」「自覚 (自分自身を感じるこころ)」「価値観 (自己基準を思い抱くこころ)」で構成された15項目5件法の質問紙である。

「受動的意識」を測定するために、首尾一貫感覚尺度 (SOC-13) を用いた。SOC-13 は、「把握可能感 (状況に応じた予測と説明ができ)」「処理可能感 (状況に対応するための資源が得られ)」「有意味感 (その状況に自己投入する意味が有る)」という状況刺激に対する確信で構成された13項目5件法の質問紙である。

統計的分析は、SPSS Amos19を使用して仮説モデルの共分散構造分析を行いその妥当性を検討した。

【結果】

最終的に得られた仮説モデルの適合度は、GFI=0.98, AGIF=0.95 の値を有し、RMSEA=0.04 を示した。モデル各部の影響指数 (因果係数) に関しては、SOC-13 と SRS-A の観測変数「意味感」「自覚」「価値観」が0.35～0.83, SRS-A と SOC-13 の観測変数「有意味感」が0.57 を有し、SRS-A と SOC-13 の相関係数は0.29 を示していた。各係数値については、すべて統計的に有意であった ($p<0.02$)。

以上の結果より、最終仮説モデル (こころの多重構造モデル) が概ね高い説明力を有していること、また潜在変数と観測変数とが概ね適切に対応していることが示唆された。

【考察】

SOC-13 の SRS-A 変数「意味感」「自覚」「価値観」への影響指数からは、刺激反応的な受動的意識が内発的な能動的意識より上位に機能していることが推察された。また、SRS-A の SOC-13 変数「有意味感」への影響指数からは、内発的な能動的意識が刺激反応的な受動的意識より上位に機能していることが推察された。

これら変数間の因果関係および SRS-A と SOC-13 の相関関係から「こころの多重構造モデル」が容認され、私的スピリチュアリティ (SRS-A) と首尾一貫感覚 (SOC-13) の機能統合的な相互関連性が確認された。

一般演題 2

卒後2年目の新人看護師の経験と看護**—新人看護師の看護実践に関するナラティブからとらえた成長の構造からの報告—**○田中いずみ¹, 比嘉勇人¹, 山田恵子¹¹富山大学大学院 医学薬学研究部 (医学) 精神看護学講座**【研究の背景と目的】**

医療現場は現在、医療の質の改革や高度医療の一端を担う看護の役割拡大の流れに沿って、看護実践能力の育成に関心が向けられている。看護実践能力の育成が強調される原因には、医療現場のニーズと新人看護師の看護実践能力の低下があげられ、中でも新人看護師の看護実践能力の低下は看護の質を保障する上で大きな課題となっている。新人看護師の看護実践能力および成長度をチェックリスト項目の自己評価により調査したものや、修得過程を構成的な質問法により調査したものはあるが、質的に特にナラティブを用いて新人看護師の成長を研究したものはみられてはいない。

本研究では、新人看護師の看護実践に関するナラティブにより意味づけられた、成長を構造的に明らかにすることを目的とする。

用語の定義：ナラティブ：思考，意図，出来事の解釈，行動とアウトカムの時系列記述を含む，患者ケア事例の記述。

【研究の方法】

富山県内の総合病院に勤務する新人看護師（卒業後2年め）を参加者とし、卒業後就職してから2年間の心に残る臨床場面での経験を面接により聴取する。参加者のナラティブから、成長がどのように変化・形成されているかという視点から、新人看護師の成長について構造化を行う。ナラティブをデータとするエピソード・インタビューを援用した事例研究である。

倫理的配慮：本研究は富山大学の臨床・疫学研究等の関する倫理審査委員会の承認（臨 23-18）を得て実施した。研究参加者に対して、研究の目的および方法，自由意志による参加であること，得られた結果について本研究目的以外に使用しないこと，匿名性の確保，結果の公表について文章と口頭で説明を行い，同意書に署名を得た。

今回の報告では，書面と口頭による発表の都合上からAさんの1事例のナラティブから，臨床場面における経験と看護に対する思いに焦点を当てて報告する。

【結果および考察】

B病院の外科系混合病棟に勤務するAさんのナラティブを見てみると，Aさんは膀胱瘻を持つ患者が敗血症性ショックを起こした出来事について語っていた。患者が入院となった状況，日頃Aさんの行ってきたケアや急変当日の状況からは，Aさんの看護実践がうかがえる。Aさんは患者さんの膀胱瘻からの排尿の汚染に気づいていながら，行動を起こさずにいたこと，患者の既往歴にもっと早くから注目すべきであったと悔やんでいた。また患者の急変に対応できなかったという思いも加わって，Aさんは知識と経験が自分には必要だと考えている。ガイドラインに行動を規定されているベナーのいう新人看護師の特徴を表していると考えられる。

しかし一方で看護が何だかわからないと話し，日々の業務に疑問を感じていた。このことは業務の流れにとらわれて，そこに看護を見出せない状況と推察され，むしろガイドラインに行動を規定されているベナーのいう新人看護師の特徴を表していると考えられる。

一般演題 3

臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について—KH Coder を利用した分析—

○松浦純平¹, 上野栄一², 一ノ山隆司³, 京谷和哉⁴, 上平悦子¹, 梅林かおり¹

¹奈良県立医科大学医学部看護学科, ²福井大学医学部看護学科,

³国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科, ⁴真生会富山病院

【目的】

本研究の目的は、外科病棟に勤務する臨床看護師（以下、看護師）が術後せん妄発症予防のために取り組んでいる看護実践は何かを明らかにし、今後の術後せん妄発症予防に対する示唆を得ることである。

【方法】

対象：A および B 大学医学部附属病院外科病棟に勤務する外科領域における臨床経験 5 年以上の看護師 20 名を対象とした。調査期間：2010 年 10 月 12 日～2011 年 2 月 8 日。調査方法：プライバシーが保護された個室にて半構成的面接法を実施した。研究対象者の承諾が得られた場合のみインタビューを実施し会話内容を IC レコーダーに録音した。分析方法および使用ソフト：インタビューから得られた術後せん妄発症を予防するために看護師が取り組んでいる看護実践について語られた内容を分析対象に計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用し、記述統計、対応分析、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分類を実施した。倫理的配慮：本研究は研究者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認（番号：102403）を得た。研究実施前に研究者が研究参加者へ本研究への参加は自由参加であり、途中で辞退可能なこと、研究成果発表時は個人が特定されないように匿名性を遵守することなどについて説明を行い承諾書へ自署を貰い承諾を得て実施した。

【結果】

形態素解析結果：術後せん妄発症予防に関するインタビューについて形態素解析を実施した結果、総単語数 11,129 語より 448 種類 1,345 語の名詞を抽出した。抽出された術後せん妄発症予防についての取り組みに関連する名詞に着目した結果 370 個の構成要素を抽出した。高頻度に出現した名詞は「説明 (30)」、「術前 (27)」、「自分 (26)」、「家族 (20)」、「環境 (20)」、「状況 (15)」、「リズム (13)」、「痛み (10)」などであった。階層的クラスター分析結果から、疼痛除去、十分な睡眠の確保、積極的離床に基づく生活リズムの再構築等など 8 つのクラスターに分類された。抽出された名詞の出現パターンの類似性を線で結んだ共起ネットワーク分類の結果から、看護師は術前に患者家族へ十分な説明の実施、術後における十分な睡眠確保などの看護実践に取り組んでいた。

【考察】

本研究結果から、看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説明を実施し理解を促す様に努めることで急性混乱を予防する関わりについて意識し実践していること、術後せん妄発症三要因の一因である誘発因子に含まれる術後睡眠障害に起因するサーカディアンリズムの変調からの早期改善を目指した看護実践に取り組んでいた。これら看護師の取り組みは、術後せん妄発症要因のうち特に誘発因子に対する関わりを実践しておりエビデンスに基づいた看護実践であることが示唆された。

一般演題 4

3e-analyzer システムを用いた双方向授業の効果

○上野栄一¹、松浦純平²

¹福井大学医学部看護学科、²奈良県立医科大学医学部看護学科

【目的】近年、教育の現場では、e-learning やCAI を用いた授業が増大しつつある。授業や研修会では、講義は対象者と教員との相互作用の中で行われる、また、学生や研修生の学習意欲を知り、またどのくらい内容を理解したかを知ることは次の授業の展開を考えるうえで大変重要である。本研究では3eAnalyzer を用いてα大学が実施した研修会での教育効果を検証することを目的に研究を行った。

【方法】対象：研修会の受講生（看護師）57名を対象に実施した。回答45名、有効回答41名であった。調査は、平成23年6月に実施した研修会（看護研究研修会）を2部構成（前半と後半）とに分けて実施した。前半部分では3e-Analyzer（双方向授業システム）を用いない講義、後半は3e-Analyzerを用いた講義をし、前後の講義内容の理解度とモチベーションを比較した。調査内容は次の項目について4回答肢として得点化した（講義は面白い、講義は役に立つ、スライドは見やすい、授業に積極的に参加、看護研究は楽しい、看護研究をしたい、質的研究は面白そう、量的研究は面白そう、研究は重要だ、研修会の満足度）。また、自由回答を得た。使用機器は3e-Analyzer（木村情報技術株式会社）を使用。パワーポイントグラフの表示は棒グラフとして表示。統計的検定は、Wilcoxon の符号付き順位和検定を実施した。

【結果】3eAnalyzer 使用前後の得点を比較したところ、図1に示すように10項目中9項目がアナライザーを使用した講義の方が有意に高かった（ $p < 0.05 \sim 0.01$ ）。授業の満足度も有意に高い値を示した（ $p < 0.01$ ）。また、自由回答では〔 〕内は人数；複数回答〕、楽しい（26）、面白い（20）、講義に集中できる（19）、理解が深まる（15）、みんながどのような考えを持っているかが一目でわかりとても参考になる（5）等の感想があった。

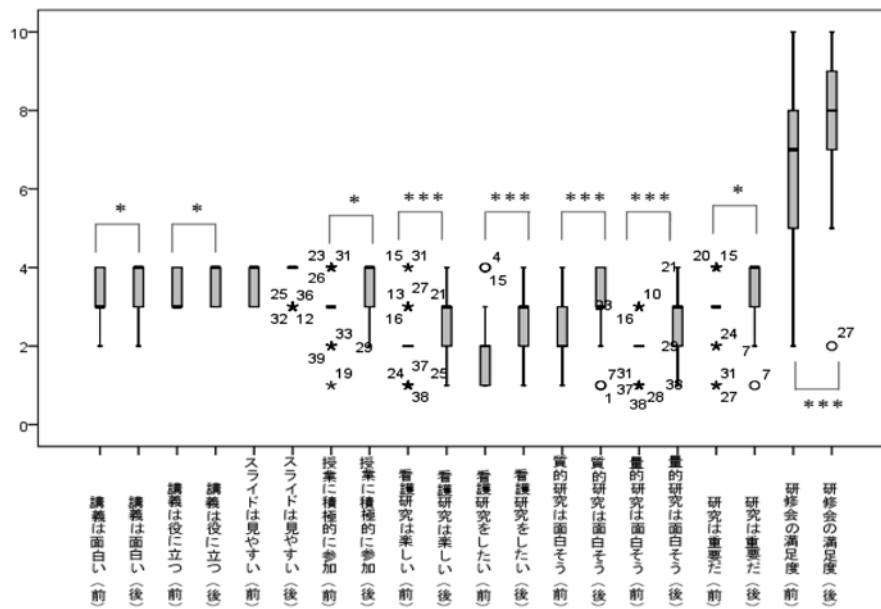


図1 3eAnalyzer使用前後の各項目得点 * $p < 0.05$ *** $p < 0.01$

【考察】ほとんどの項目で講義内容に対してポジティブな結果を得た。研修会では、授業と同様、対象者に質問し挙手する方法をとることが多いが、匿名性は保持できないため回答者にとっては答えづらいこともあると考えられる。しかしながら3e-Analyzerでは匿名で回答ができ、気軽に研修会に参加することや即座に教員から質問に対する回答が返ってくるため相互作用が生じ、研修生の学習に対するモチベーションを高めたと推察する。

【結論】アナライザーを用いた講義では授業の理解度やモチベーションが高まっていた。今後は、対象の設定を変えたり、授業の中でのアナライザーを使用した検証をさらに進めたいと考える。

一般演題 5

ラジオ放送が目覚め・昼食摂取量・睡眠導入に与える効果

○松田英之、荒谷和弘、池田紗衣子、後田あゆみ
富山大学附属病院

【目的】

臨床の間では、入院中の生活リズムの乱れによって精神状態が不安定となるケースがある。このようなケースに対して、外部刺激を取り入れてそれを繰り返すなどの援助方法が検討されている。たとえば西川ら（2000）は、精神科病棟においてクラシック音楽を起床時・就寝時に放送することによって朝の目覚め・日中の活動に良い効果があったと述べている。本研究では先行研究の外部刺激の知見をふまえ、時刻を知らせることができ、かつ聞きながらほかの作業ができるラジオ放送を採用した。ラジオ放送を起床後・昼食前・就寝前に時間を区切って流すことにより、時間感覚を覚え生活リズムの調整が行われると仮定した。

【方法】

調査期間は200X年7月～200X年8月、調査対象は神経精神科入院中の4人部屋の患者16名であった。データ収集は、自己記入式質問紙を作成し、実施前、実施後1週間目、実施後2週間目に行った。ラジオ放送は、7時から30分間、11時30分から30分間、21時30分から30分間の計3回を2週間流した。データ分析は、McNemar検定を行い、有意水準を0.05未満とした。

【結果】

ラジオ放送後に「寝不足で、何となくしんどかった」「憂うつな気分だった」「夜、音楽を聴いていることが多かった」「食べる量が増えた」「食欲がある」の項目で有意差が認められた。また、「心から楽しめることがあった」「昨日ラジオ体操をした」「ぐっすり眠れたと思う」「近頃、心配や気がかりなことがある」「朝、音楽が流れていることによって、気持ちよく目覚める日が多かった」「夜、音楽が流れることによって、ぐっすり眠れたと思う日が多かった」「食べる気がしない」の項目で肯定的傾向が示唆された。

【考察】

定時的なラジオ放送は、生活リズムの調整に効果的であった。特に、聞きながら日常作業のできるラジオ放送を30分間流すことで、時間を意識しながら計画的に行動できたことが生活リズム改善への一要因になったと考える。

クラシック音楽を用いた西川らの調査では3ヶ月間の実施期間だったが、本研究では2週間の実施期間で同様の結果が得られた。よって、ラジオ放送の選択は、効果的だったと評価できる。しかしながら、薬物治療中の患者が対象であり、背景音楽的なラジオ放送の生活リズムの調整への真の効果については、より厳密な研究デザインの設定が必要である。また、患者の精神状態や趣向によっては、ラジオ放送が不良な影響を及ぼす可能性もある。そのため、ラジオ放送の適用については患者の病状や意見に留意することが大切であり、患者の言語表現が不十分な時は、看護師が患者の意向を適宜確認する必要がある。

また、ラジオ放送の背景音楽的效果と心身のリラクゼーション促進効果との因果関係も示唆されるが、その客観的な効果判定については生理学的指標に基づいた検証を今後行っていく必要がある。

今回の調査対象は、4人部屋に入院中の精神症状が比較的安定した患者に限られていたため、個室入院中の重度の精神症状がある患者への効果についても検証していくことも必要と考える。

一般演題 6

高齢者の老いの意識と生きがいの関係～高齢者自身によるボランティア活動を通して～

苗加拓也¹、野口真里¹、長津 舞²、新鞍真理子³¹富山大学附属病院、²近畿大学医学部附属病院、³富山大学大学院医学薬学研究部

【目的】

日本では、急速に高齢化が進み、高齢者人口が増加している。現在、高齢化率は23.1%であり、4人に1人が高齢者である。また、65歳の平均余命は、男性18.86年、女性23.89年である。高齢者は、約20年間の高齢期を住み慣れた地域で、できるかぎり健康で生きがいを持ち自立した生活を送ることが望ましい。また、高齢者のボランティア活動などの社会参加による活力ある地域づくりが進められている。高齢者のボランティア活動への参加は、心身の健康度を高めることや生きがいになることが報告されている。高齢になってもボランティア活動を続け、生きがいを持ち続けることが重要である。本研究では、高齢者が老いを感じながら、ボランティア活動を通して、どのような思いで生きがいを持ちつづけているのか明らかにすることを目的とした。

【方法】

T市ボランティアセンターに登録している60歳以上のボランティア団体の代表者を紹介してもらい、研究協力を依頼した。さらに代表者からボランティア仲間を紹介してもらった。2010年9月下旬から10月上旬、研究協力が得られた9名（男性3名、女性6名）に半構造化面接を行った。面接は、研究協力者の希望により自宅またはボランティア活動先で実施した。インタビュー時間は、28～77分で平均49分だった。面接は、研究協力者の承諾を得て、ICレコーダーに録音した後、速やかに逐語録を作成した。逐語録は、修正版グラントッドアプローチの手法を参考に分析した。研究に際し、研究の趣旨、個人が特定できないように匿名化すること、面接を録音することなどを説明し同意書を作成した。本研究は、富山大学倫理審査委員会の承認を得た。（臨認22-62号）

【結果】

カテゴリーは《》、概念は【】で示した。高齢者は、《老いと上手の付き合い》ことや《生きがいを支えていること》により《ボランティアを通して生きがいを持ち続ける》ことを可能にしていた。高齢者は、【好きなことをボランティアで行う】ことにより【仲間とのつながりがある】ことや【ボランティアにやりがいを感じる】ことで【生きがいを持っている】と自覚し、《ボランティアを通して生きがいを持ち続ける》ことを可能にしていた。また、【老いを感じる】と【老いを意識しない】ことや【現在持つ病気と上手に付き合い】ことで《老いと上手の付き合い》工夫をして【好きなことをボランティアで行う】ことが出来た。さらに、【ボランティア以外にも趣味や役割がある】ことや【家族と良好な関係にある】ことが《生きがいを支えていること》であり【生きがいを持っている】という自覚を強めていた。

【考察】

高齢者は、老いと上手に付き合いすることで前向きな思考を持ち、ボランティア活動に参加するという積極的な行動をとることにより生きがいを持ち続けていた。高齢者が生きがいを持ち続けるためには、健康面の他、地域に密着したボランティア活動の支援や高齢者の体調に合わせてできる活動の場を提供することが求められる。

特別講演

実践と研究

省察によってしなやかに対立の垣根を越えるプロフェッショナルとしての看護職

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程

梶山 委都子

要 旨

看護は実践の科学であると言ったのは、かのフロレンス・ナイチンゲールである。一般には、クリミア戦役における利他的な行為によって「ランプを持つ貴婦人」と称されて有名な彼女は、世界で初めて看護とは何かを定義し、その名前を冠した看護学校によって職業としての看護を確立した「看護の祖」である。開祖のことばだからというわけではなく、今日の看護職にとって、看護が科学であること、少なくとも科学を志向していることは自明である。しかし、それはどのような「科学」、さらには「学問」なのであろうか。

一方、看護は常に実践を伴うものであり、むしろある種の実践に看護というなまえが付与されたところに看護の誕生があると看護史は教えている。したがって、看護実践に関しては疑問の余地がないようであるが、いざそれを記述し説明するよう求められるとたちまち困難に直面する。どこで、誰が何をどのようにすることが看護実践なのか。現代ではほとんど問われることのないこの問いは、既に答えが定まったからではなく、ただ忘れられているだけだと気づかされる。

看護がどのような科学であるとしても、それを科学だとするところに研究の必要性が立ち現れる。科学は現象を合理的に説明する知識を追究し、体系付けた学問であり、そのために現象を研究することを要求するからである。したがって、「看護は実践の科学である」との宣言は、看護が実践を研究することを通して看護学として体系化されることを意味し、今日の大学院課程をもつ看護系大学の増加は当然の帰結であるといえる。フロレンス・ナイチンゲールは、学問としての看護にも道を拓いた開祖なのである。

ただし、「実践の科学」と訳出されたナイチンゲールのことばは、Art & Science である。直訳するなら「芸術と科学」ということになるが、言語は文化の表象であることをふまえたうえで、彼女がどのようなものを Art と表現しているか考え合わせると、Art & Science を「実践の科学」とする妥当性はある。むしろ Science の理解にこそ注意が払われるべきであろう。なぜなら、ナイチンゲールが扉を開けた「実践の科学」への道筋は、Science 概念の変遷によって当時とは異なる方向をめざしているように思われるからである。ナイチンゲールがつかみえた「看護というもの」が現代にも通じる本質的なものであると前提したうえでのこの思いは、D. A. ショーンが提示した実践に関わる新たな専門家像が、ナイチンゲールにさかのぼって「実践の科学」である看護について考えてみるよう促すことに由来する。それはショーンと、ナイチンゲール看護論を継承した『科学的看護論』の著者である薄井坦子の、実践に関わる主張に共通性があるからである。

多彩な思想家であるショーンは、実践的関心から実践的知識を追究し、1983年に発表した『省察的実

『実践とは何か (The Reflective Practitioner)』において「思考と活動」「理論と実践」という二項対立を克服した専門家像を描いた。そのなかで、行為の中の省察というアイデアに基づいた実践の認識論を提唱したと記述しているショーンと、同じく認識論を用いて看護実践を説明する薄井には3つの共通点がある。1点目は実践に関わる専門家が実践において行う「問題の設定」過程への注目であり、2点目は専門家と専門家に関わる実践の対象者の関係が相互行為的であること、3点目が実践者である専門家は実践の文脈における研究者でもあるという指摘である。

専門家の実践を認識論で読み解く彼らの主張の共通点は、ショーンの著作が現在に至るまで専門職教育に多大な影響を与えていることと、『科学的看護論』が薄井が実践から看護を学んだ学習成果であると見なすことができることから、実践に関わる専門家である看護職の学習の方向性を示すものともなっているが、同時に実践を研究することの説明にもつながっている。なぜなら、ショーンが「行為の中の省察」、薄井が「認識ののぼりおり」によって高められるとした、複雑で不安定で一回性の実践に専門家が主体的に良いと判断する変化を起こすための「問題を設定する能力」は、暗黙となっている実践知を記述し説明することを可能にし、実践を研究として成立させる能力だからである。つまり、彼らの主張の重複部分から「実践の科学」である看護の研究のあるべきひとつの姿が浮かび上がってくるのである。

ナイチンゲールは看護の理論書を残さなかった。そしてただ、「新しい芸術であり新しい科学であるものが創造されてきた」と語っただけである。したがって、薄井がナイチンゲール研究者で、その理論書がナイチンゲールの看護思想を継承していることをもって、ショーンと薄井の主張の重複部分が示唆する実践研究をナイチンゲールが拓いた実践の科学としての看護につなげることには異論があるかもしれない。しかし、ナイチンゲールがこだわった Art である看護と、ナイチンゲールの時代の Science を丹念に紐解くとことによっても、このつながりは見えてくるのである。

まず、Art は技術とか技芸、さらには技(わざ)と訳されるが、Nature の反意語で、Nature の一部である人間が Nature にはたらきかける技術であり、Art によって Nature が完成されるとも説明されている。つまり Art とは、創造されたものとしてそこにあり、創造活動を行なうものである Nature がもつ性質を損なうことなく加工する高尚な技を意味する。たとえるなら、高度な技術というより名人芸である。そして Science は、ショーンが技術的合理性と呼んで批判した実践と研究との乖離を招く大学の知が代表する学問、すなわち科学主義と批判される以前の Science である。ガリレイ以降ともニュートン以後とも言われる Science の変質は、古代ギリシアにおいて学問を意味した哲学の流れをくむ理性の学から、自然的世界の支配と統御を課題とするものへの変化だと説明される。ナイチンゲールの時代の Science はまだ幼く、たとえば感染症の原因が細菌であることを彼女に納得させることができなかったが、それゆれに現象を合理的に説明する知の体系たることに謙虚で、実践を探究する知識の源としての役割を果たすことによって、実践と研究を強く結びつけることができるものであった。

ナイチンゲールが看護に求めた Art & Science は、魔法の如き技であると同時にそれを合理的に説明できる知の体系をもつことであった。それはショーンと薄井が主張する、実践に関わる専門家の活動とそれを記述し説明する実践研究によってあきらかになる実践知の蓄積によって可能になる。したがって、ナイチンゲールを開祖にもつ看護職こそが、理論と実践、研究と実践の間にある垣根をしなやかに越えられる実践に関わる専門家であるといえる。

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程 横山委都子

実践と研究

省察によってしなやかに対立の垣根を越えるプロ
フェッショナルとしての看護職

2011年12月10日
第12回 富山大学看護学会学術集会

はじめに

生涯学習 lifelong learning
生涯教育 lifelong education
成人教育 adult education

ペタゴジー・モデルとアンドラゴジーモデル (M.S.Knowles)		
要素	ペタゴジー	アンドラゴジー
学習者の概念	依存的なパーソナリティ	自己決定性の増大
学習の経験の役割	学習資源として活用される積み上げ	自己・他者による学習にとっての豊かな学習資源
学習へのレディネス	年齢段階:カリキュラムによって画一的	生活上の課題や問題から芽生える
学習への方向づけ	教科中心	課題・問題中心
動機づけ	外部からの賞罰	内的誘因、好奇心

研究テーマ

プロフェッショナルとしての
看護職の生涯学習
あるべき方向性

お茶の水女子大学生涯学習研究室流

研究テーマに至る過程

追及しない 語る
否定しない 聴く
代案を出さない

前提を問う 振り返り reflection
プロセスを大事にする

reflection

- 反射、映像→鏡に映った自分の姿
- 反映、投射、影響
- 熟考、反省、内省

省察、ふり返り

D.A. Schön(1983)『The Reflective Practitioner』
佐藤学・秋田喜代美(2001)
『専門家の知恵』

薄井坦子(1932 -)

前・宮崎県立看護大学学長
 ナイチンゲール研究会会長
 看護科学研究学会会長



理論看護学者

研究計画


研究計画書は書かない

研究の概要を記述し、報告し、議論する

相手を変えてく
り返す

リフレクティブシンキング

研究方法



社会学の研究方法

徹底的に事実を調べて積み上げる

↓

見えてくるものが結論

薄井坦子の略歴

- ・ 1952年4月 (20歳) お茶の水女子大学文教育学部 教育学科 入学
- ・ 1958年3月 (26歳) 同 卒業
- ・ 1958年4月 東京大学医学部衛生看護学科入学
- ・ 1961年3月 (29歳) 同 卒業
- ・ 1961年～1965年 日本医師会病院課
- ・ 1965年～1975年 東京女子医科大学 大学病院、高等看護学校、短期大学
- ・ 1974年『科学的看護論』上梓 文献→調査→実践
- ・ 1975年～1997年 千葉大学看護学部

研究目的・仮説・方法

目的:看護職の学習の方向性

仮説:『科学的看護論』は薄井の学習の成果、薄井とショーンの主張は本質的に同じ

方法:『科学的看護論』上梓に至る過程および薄井とショーンの主張の記述 課題探求型の質的研究

薄井坦子の学習過程の構造

家庭教育

原理的発想 自己肯定感

最高レベルの大学教育

昭和1ケタ世代特有の歴史性

学習能力

武見太郎

『看護とは何か』という問いとの出会い

文献研究 調査研究

実践

ナイチンゲール

『科学的看護論』

湯横マス 小林富美栄

東京女子医科大学

湯槇・小林による
東京女子医大学の教育実践の特徴

- 看護の対象である人間に焦点を据えた新しいカリキュラムで出発
- 看護の対象の概念を広げた、病人のケアという視点から健康上のケアという視点
- 実習のあり方の変革(実務見習いではない)
- 具体的な実践例
看護運営委員会の設置、年2回の入学生受け入れ、学年別授業時間の設定、卒業生の重点配置、教育病棟、戴帽式・寮の廃止、教育経費の自己負担


D. A. Schön (1930 -1997)

ボストン生れの多才な思想家

高校卒業後、パリでクラリネットを学ぶ(クラリネット奏者)

イエール大学で哲学を専攻

ハーバード大学大学院で学位取得(Deweyに関する研究)



企業のコンサルタント、政府の調査研究、NPOの代表、MIT客員(のちに正規)教授

D. A. Schön:
“The Reflective Practitioner” (1983)

- 「思考と活動」「理論と実践」という二項対立を克服した専門家像を提示
- 専門職教育に多大な影響を与え続けている代表作

↓

- 専門家の実践を支える「行為の中の省察」という概念の提示
- 行為の中の省察に基づく実践における「問題の設定」過程全体が探査的な研究であると主張

薄井とショーンの相異点

- 性別
- 国籍=文化的・思想的背景
- 著作が発表された年代=時代背景
- 「科学」に対する姿勢

薄井:看護は科学にならなければならない

⇕

ショーン:「技術的合理性 technical-rationality」として徹底的に批判

薄井とショーンの共通点

- 専門家の実践を対象
薄井:看護職
ショーン:建築家、精神分析医、システムエンジニア、都市プランナーなど
- 実践する専門家の認識への注目
看護者には認識論が必要
行為の中の省察
- 実践における「問題の設定」を重要視
- 専門家と対象は自立した相互行為的關係
- 実践に関わる専門家は研究者

行為の中の省察 reflection-in-action

行為の中の省察とは、実際にある行為を行なっている最中に参照している「知」、行為の中に生まれる「知」、つまり暗黙になっている理解について暗黙のままではなく表に出して批判し、再設定しなおし、将来の行為のなかで具体化する理解についても省察することである。

プロセスレコード
頭脳の働きの法則性を基盤に
すえた科学的な認識論

問題の設定

『省察的実践とは何か』p. 40

問題の解決ばかり強調すると、私たちは問題の「設定」(problem setting)を無視することになる。つまり、どのような解決がよいのか、どんな目的を達成すべきであるのかを定義し、選ぶべき手段が何かを決めるプロセスを無視することになるのである。現実世界では、諸問題は所与のものとして実践者の前に現れるわけではない。(略)「問題状況」を「問題」へと移し変えるためには、実践者はある仕事をしなければならない。

専門家と対象の関係

『省察的実践とは何か』p. 313

省察的実践者は自分自身と同様クライアントにも意味づけし、認識し、計画する能力があると考ええる。省察的実践者は自分の行為が、意図する以上に異なった意味をクライアントにもたらしていることを認識しているし、クライアントの行為のもつ意味が何であるかを発見するように心がけている。省察的実践者は、自分自身の理解をクライアントが共有できるようにする責任を認識している。

看護上の問題の解決に向かってともに歩む

実践に関わる専門家は研究者

『省察的実践とは何か』p. 70

行為の中で省察するとき、その人は実践の文脈における研究者となる。

看護は実践の科学だから実践から取り出してこなきゃいけない。実践を材料にするだけじゃダメ。

問題の対象の構造に分け入って問題を解こうとする、看護職でなければできないその実践領域の学的研究に取り組むべきである。

専門家の学習

シヨーン

薄井

- 自分が行なった行為についての省察がなされないと、専門家のわざartは個人的なもの
- 実践研究に携わる実践者と研究者とのパートナーシップ多様な形態から、省察的な研究が実践に携わる専門家の学習に寄与する

- 看護実践力を高める実践研究が重要
- 実践状況に関わった当事者がその場面で何をどう認識したのか、ふり返って丹念に分析
- プロセスレコードの分析は看護過程の謎を解く方法論

専門家の学習の方向性

シヨーン

薄井

- 「問題の設定」は「行為の中の省察」による「見なし」によってなされる、実践状況により変化を起こす実験
- 「問題の設定」を行なう「わざart」である行為の中の省察能力は、相互行為の理論を明確に把握し、再構築することによって高まる
- 看護上の問題を明確にする能力は、認識の3段階を自在にのぼりおりすることで培われる
- 患者と看護師双方の認識を含む現象全体を「看護とは何か」に照らして意味づけることが、看護師の専門的な判断に基づく看護上の問題の特定につながる

看護職の学習の方向性

自らの状況との省察的な対話能力である認識能力を鍛えるとともに、常に実践上の事実を意味づけるための理論を意識し、それを看護者間で共有する学習機会をもつことによって明確にし、必要に応じて再構築していく



実践で確かめる